

ことばの教室ガイド

～教職員の理解を深めるために～



佐倉市教育センター

はじめに

佐倉市には、言語に課題がある子どものために「ことばの教室（通級指導教室）」があります。設置されている学校に在籍している子どもたち（自校通級）とともに、必要に応じて他校からも通級しています。

言語の課題は、本人も保護者も気づきにくいことが多く、また気づいてもどうしたらよいか戸惑うことがあります。学級担任の先生方には、適切な対応のあり方を理解していただき、本人に寄り添った支援をしていただくことが、とても大切になってきます。

このリーフレットは、佐倉市内の先生方に「ことばの教室」に対する正しい理解と必要な協力を得るために、ことばの教室担当者が中心となり、佐倉市教育センターがまとめたものです。ぜひご活用ください。

目 次

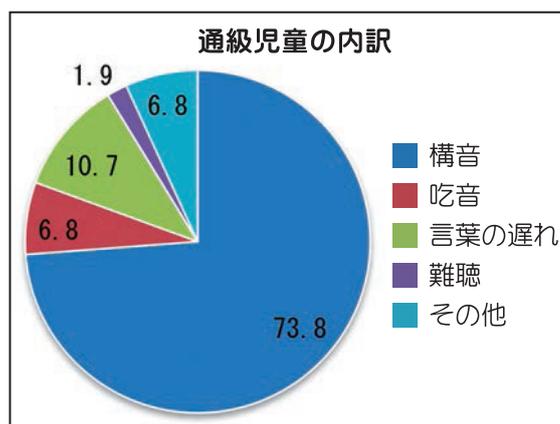
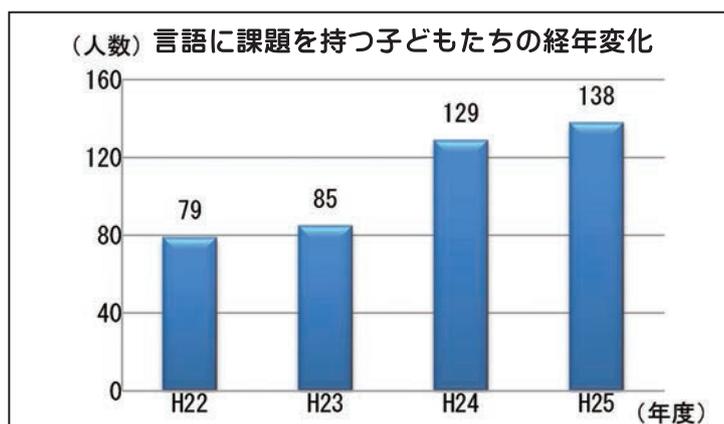
はじめに	2	気づきから指導を受けるまで	6
ことばの教室とは	2	学級でできること	6
指導の対象となる子ども	3	きこえに課題のある子ども	8

ことばの教室とは

- 通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする子どもたちが、その課題に応じた特別な指導を受ける場を「通級指導教室」といいます。「ことばの教室」は、その中で「言語やきこえ」に課題がある子どもたちの指導を行う教室です。
- 在籍する学級で各教科等の授業を受け、ことばの教室に週1、2時間を基本に通い、それぞれの子どもの状態に応じた特別な指導を受けます。これを「通級による指導」といいます。学校教育の一環として教育課程に位置付けて、一人一人のニーズに応じた指導を行います。
- 指導形態は基本的に1対1の個別指導ですが、必要に応じてグループ指導を行うこともあります。



佐倉市の実態



指導の対象となる子ども

- こうおんしょうがい構音障害（発音に誤りがある）
- きつおん吃音（話す時にことばがつかえたり、つまったりする）
- 軽度のことばの発達の遅れ（週1，2回の指導で成果がみられるケース）
- 難聴（耳がよく聞こえない）

○こうおんしょうがい構音障害（発音に誤りがある）

・発音の獲得について

発音は、どの音がどんな順序で、何歳くらいまでに正しく言えるようになるかということについては、ある程度の規則性があります。だいたい6歳くらいまでには日本語全ての音を正しく言えるようになるといわれています。ただし、それは一応の目安であって、個人差がみられます。

発音が完成する時期になってもある音の発音が正しく言えなかったり、誤りが習慣化していたりする場合を こうおんしょうがい 構音障害（発音の誤り）といいます。



・発音の誤り方について

★置き換え

ある発音が他の音に置き換わってしまう。

(例) さかな → たかな つくえ → ちゆくえ
 じてんしゃ → じてんさ ライオン → ダイオン 等

★しかん か こうおん歯間化構音

ある音を発音する時、歯と歯の間から舌がでてしまうため、発音が曖昧な音になります。
サ行音、ザ行音、タ行音、ダ行音に多くみられます。

呼吸をする時に鼻呼吸ではなく、口呼吸をしていることが多いです。

★省略

単語の中の子音が省略されています。

(例) さかな さあな ともだち ともあち
 SAKANA → SA ANA TOMODATI → TOMO ATI

★歪(ひず)み

息がまっすぐにでないため、口の中に飴が入っているような音になります。

主に、キ、ケ、シ、チ、ニ、リ音やサ行、ザ行音に多くみられます。

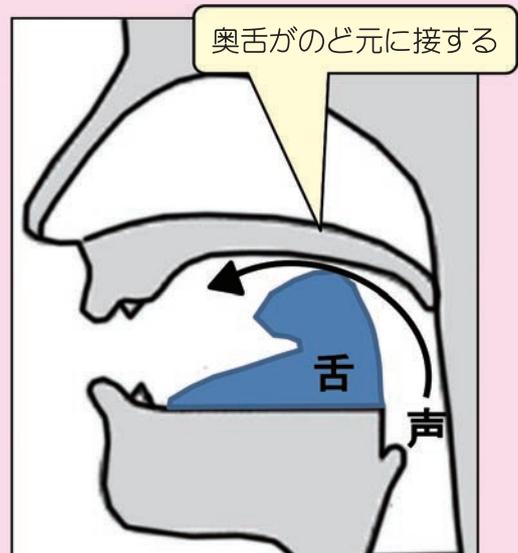
【一例として】

カ行音、ガ行音が出にくい時は

『奥舌がのど元に接する』

ように(右図)指導します。

カ行音・ガ行音の口の動き



○^{きつおん}吃音（話す時にことばがつかえたり、つまったりする）

吃音とは、なめらかに話すことができず、本人や周囲の人がそれを困ったものだと気にかける状態をいいます。うまく発音できない状態には3段階あります。

- | | |
|---------|----------------|
| 1 繰り返し | 「ぼぼぼぼく・・・」 |
| 2 引き伸ばし | 「ぼ—————く・・・」 |
| 3 難発 | 「・・・・・・・・・・ぼく」 |

3番目の状態が一番発音しにくく、床を蹴ったり、体をゆすったりして声を出していることもあります。この行動を^{ずいはんこうどう}随伴行動といえます。

保護者から吃音があると言われても、学校ではみられないこともあります。

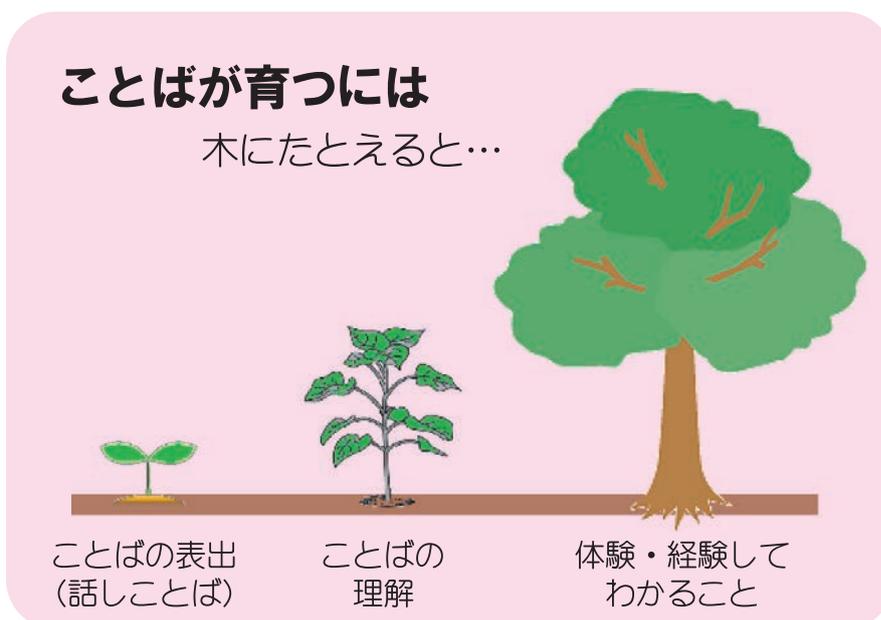
吃音は緊張した時だけみられるのではなく、リラックスしている時にみられるケースもあります。

○軽度のことばの発達の遅れ（週2,3回の指導で成果がみられるケース）

ことばの数が少なく、自分の思いを伝えられなかったり、書けなかったりするお子さんです。毎日、指導が必要というのではなく、週に1, 2回の指導を受けることでクラスの学習についていけるお子さんは、ことばの教室でも語彙の^{こい}拡充を図るなどの指導が可能と考えます

○難聴（耳がよく聞こえない）

リーフレット6ページからの「きこえ」のページをご参照ください。



気づきから指導を受けるまで

学校

保護者からの相談や学級担任、専科教員、養護教諭などの**気づき**から特別支援コーディネーターに連絡
校長をはじめ、関係職員で最適な支援方法を検討

佐倉市教育センター TEL 4 8 6 - 2 4 0 0

保護者、または学校から教育センターに連絡
日程調整後、保護者・児童の面談及び検査の実施（**見立て**）
通級の必要があるかどうかを判断し、教育センターから学校へ連絡

各地区のこたばの教室

担当者から保護者に直接連絡し、通級日等の相談
必要に応じて再度の実態把握

指 導 開 始

学級でできること

(1) 子どもの話に耳を傾ける

はじめは、言っていることがわかりづらくても、くり返し聞く機会をもつことによってわかってきます。子どもは自分自身が、受け入れられたと感じることで、さらに話したい気持ちになります。その光景をみて、他の子も安心できます。そして、子どもにはたくさん話しかけてください。音を聞き分ける力もついてきます。

(2) 言い直しをさせない

誤った発音でも言い直しをさせないようにしましょう。まだ、音の聞き分け（聴力とはべつ
の力）ができていなかったり、正しい音の作り方がわかっていなかったりしています。「ちが
うよ」と言われても、どうしてよいのか、本人はわからないことが多いのです。

(3)他の子と同様に指名する

ことばがうまく言えないから指名をさけるのではなく、本人が嫌だということを意思表示しないかぎり、他の子と同じように対応してください。これは発音に誤りのある子だけでなく、吃音のある子にもとても大切なことです。

(4)人間関係の調整を図る

聞き手が笑ったり、真似をしたりして子どもに恥ずかしい思いをさせないでください。特に吃音のある子は、うまく話せたからといって、ほめたりせず自然に接することが大切です。吃音の症状がでた時に、自分自身を否定してしまう可能性があるからです。

吃症状には波があり、調子のよい時と、そうでない時があります。難しいことですが、いつでも同じように接することが大切です。

また、発音に誤りのある子は、練習の段階によって接し方が違ってきます。ことばの教室の担任から、それぞれの状態に応じた接し方の説明があると思います。

(5)聴覚と視覚の両方を活用する

発音に誤りのある子は、文字を自分が言った通りに書いてしまうことがあります。間違いを直す時や、新しいことばを指導する時は、聴覚だけでは音の聞き分けが曖昧なので、聴覚・視覚の両方から理解できるような方法で教えてください。

(らくだ→くら・だくら、なふだ→なふら、げんきです→げんきれす、等の誤りをする子に多いです。)

(6)通級していることを隠さない

子どもがことばの教室に通級している場合は、通級していることを隠さないでください。クラスみんなに正しく理解してもらうことが大切です。友だちの応援はとても励みになります。先生と友だちに「いってらっしゃい」「お帰りなさい」と声をかけてもらうと、励みになります。子どもが通級している間に、クラスをあける時は、黒板に行き先を書いておくなど、通級児が教室に戻ったときに寂しい思いをしないよう、ご配慮ください。

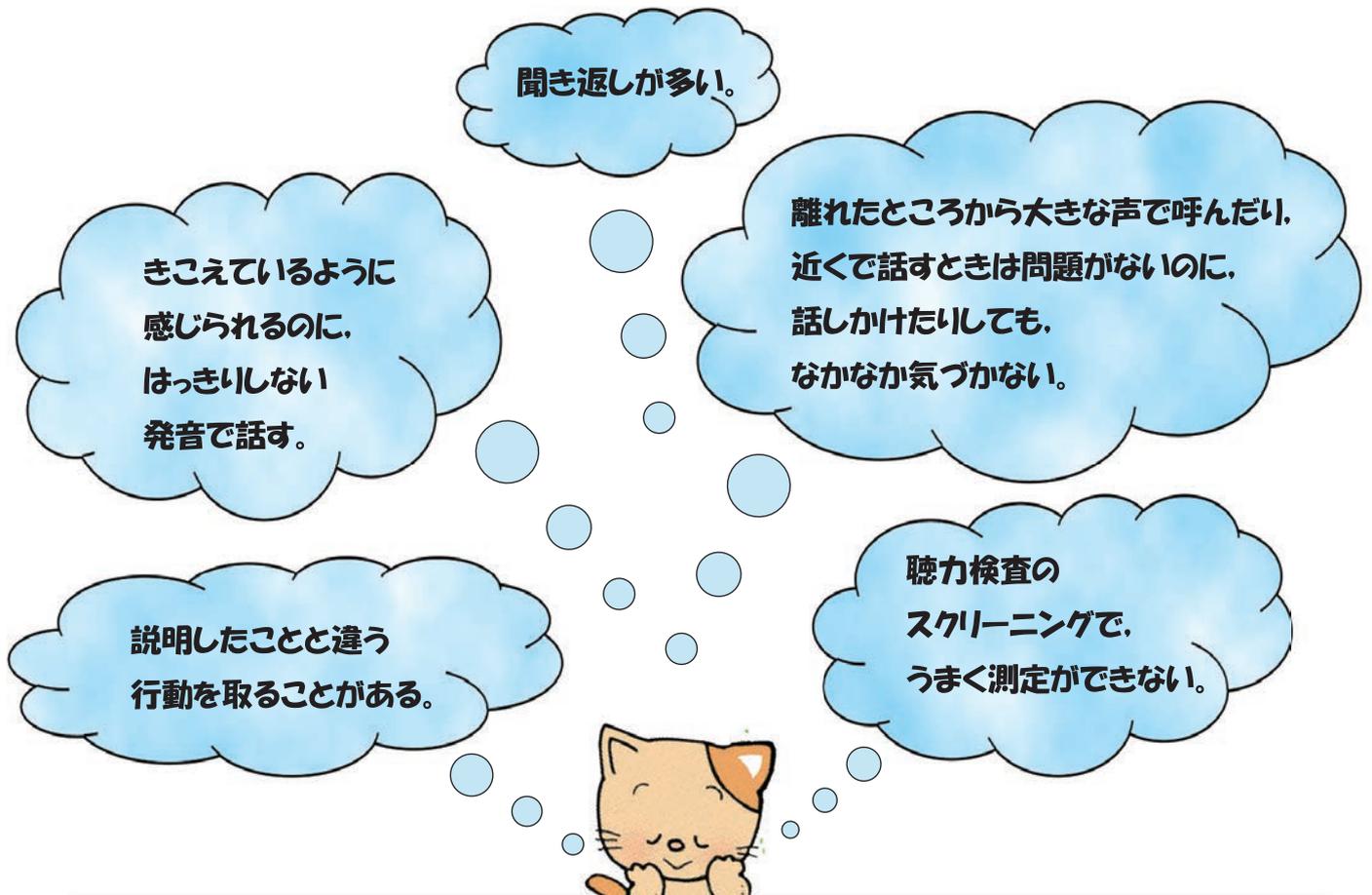
(7)よく噛んで食べる指導

発音に誤りがなくても、口をあまり開けずに話す、話の語尾がはっきり聞き取れないなどの子が増えていませんか。

発音器官は、食べる器官と共通しています。毎日の食事で、よく噛むことを意識するだけで、口の周りの筋肉は発達します。固いものをしっかり噛むことも大切です。日々の給食の時間を有効に使って、はっきりと、わかりやすい話し方のできる子を増やしたいものです。

きこえに課題のある子ども

こんな様子の子どもの心当たりはありませんか？



こんな場合、お子さんのきこえに原因があるかも知れません。

幼少期は^{しんしゅつせい}滲出性の中耳炎等に罹りやすく、^{かか}ことばを獲得する時期に重い中耳炎に罹るとききこえに影響が出てくる場合があります。また軽度の難聴は、比較的静かで近い距離にいる人との一対一の会話にはさほど問題が感じられないため、発見が遅れる場合があります。

学校の健康診断では、4000Hz周波数の25dBの音と1000Hz周波数の30dBの音の2種類の大きさが、聞き取れているかのスクリーニングを行います。このとき、どちらの音も聞き取れていない場合はいくつかの問題が考えられます。中でも、集団のざわついた中にいるため先生方の指示が子どもの耳に届いていないこと、日常の何気ないことばの意味が理解できないまま周囲の行動を見て真似をしていることなどは、聴力でなく聞く姿勢の問題と誤解されたり見過ごされたりすることがあります。

お気づきの場合は、佐倉市教育センターへご相談ください。



難聴のお子さんへの支援



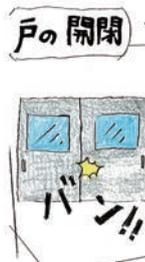
補聴器のことを知ってください



補聴器を使用することで日常会話の大半を聞き取ることができます。

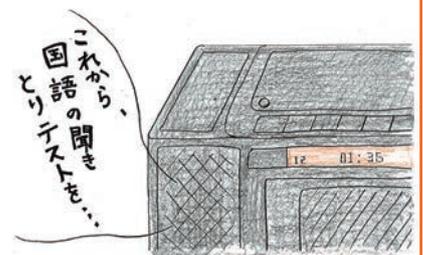


話をするときは、周囲の音をできるだけ除去してください。椅子を引きずる音が出ないように、テニスボールなどをつけると防音に役立ちます。



周囲の小さな音も拾ってしまうので、静かなところでしか正しく聞き取れません。

電子音 (CD, 放送機器など) は、子音が聞き取れないことがあります。



聞き取りのテストは、先生の肉声でお願いします。



座席は先生の顔に光が当たる位置が良いです。

前から2番目で、聴力の良い方の耳から聞き取れる位置が良いです。

グループにしたときは、真ん中の席になるようにするとどの子の声も届きます。

その他,

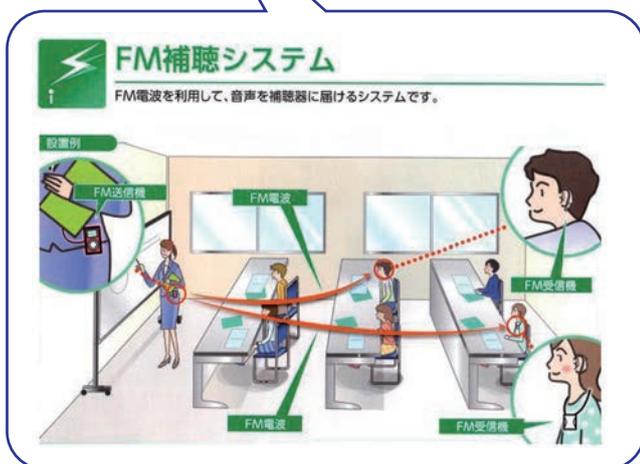
水泳学習では補聴器を外します。指示は直接目の前で話すか、ボードなどに書くと伝わります。

運動場や校外学習のような屋外の音は聞き取れないことが多いです。

指示は文字で示すか、全員に説明した後に個別に補足していただくと良いです。

校外学習など外部の方の話は、一番前で聞かせる、話の要点をメモで示す（要約筆記）

FMマイク の活用などの対応が有効です。



わかった？

(よくわからないけど聞き返すのが嫌だから) 「わかった」って言うておこう。

「今の話からどんなことがわかった？」と内容の確認をお願いします。

先生たちの気づきと配慮により
生活しやすくなる子どもたちがいます。



ことばの教室リーフレット

平成26年3月

発行 佐倉市教育委員会 教育センター